

令和6年度上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会

第2回急変時対応部会を開催しました



○10月7日(月)、第2回急変時対応部会を開催しました。部会員7人、事務局3人のほか、オブザーバーとして上越地域在宅医療推進センターコーディネーター1人が参加しました。

○まず始めに、7月24日に開催された「上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会(以下:協議会)」の内容について、事務局から報告を行いました。

○協議会で出された意見として、「専門部会の取組が『ケアマネジャーを対象に研修会を開催する』という流れになっているが、医療側が介護側にどのように寄り添っていくべきかの検討も必要ではないか」といったものや、「協議会の取組を知らない医師や専門職が多いのではないか」という意見等が出されたことを共有しました。

○これを受けて、改めて部会員間で日頃の業務を振り返り、退院時や急変時に係る地域の実態について情報共有しました。

・退院前に病院の各部署(医療相談員、退院前調整看護師、病棟看護師等)から連絡が入ることがあり、ケアマネジャーや訪問看護師が情報の整理に苦慮している。

・患者が介護保険を使っていた場合、急変時に備えた日頃の対応も含め、「ケアマネジャーがついているから安心」という認識があった。

・とある高齢者の看取りの支援において、本人や家族に関わる支援者が「本人の状態が変化したら、救急車ではなく訪問看護師に連絡する

こと」を繰り返し伝えてきた結果、家族が慌てることなく、本人が望んでいた自宅での最期を迎えることができた事案があった。

・(前述の看取り事案について)救急隊としては、出動要請を受ければ出動し、法に基づいて医療機関へ搬送せざるを得ない。

・救急医療の現場において、家族自身も本人の意向が分からないまま搬送されてくるケースがあり、突然の「いざという時」に対して、困惑する家族を見ている。

研修会の内容に関する意見交換(主なもの)

・「ケアマネジャー向け研修会」という形より、地域包括支援センターや病院職員、訪問看護師も含めた対話の場所になると良い。

・独居高齢者のよくある事例として、近隣に住んでいて日頃面倒を見てくれる二男家族がいても、緊急連絡先には遠方に住んでいる長男の連絡先を伝えてくることがある。この場合には、それぞれの支援者が「緊急連絡先とは何か」を丁寧に伝えることが必要だが、こうした「よくある人」で事例検討ができると、参加者の理解を得やすく、グループワークが深まるのではないかと。

・救急医療情報キットが救急隊の出動現場でどのように活用されたか、聴き取り調査をすることは可能である。

・今後ますます独居高齢者や身寄りのない高齢者が増えることが予測されている中で、急変時に備えた日頃の取組がいかに大切か、共通認識が持てる内容にしたい。

・参加者同士の顔の見える関係性構築のため、集合型での開催が良いのではないかと。

今後の部会の取組について

MCS等を活用して研修内容を検討し、年内に「意見交換会(仮)」を開催予定です。

※次回の部会 令和7年1月頃に開催予定